

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

世界遺産ブームに想う (巻頭エッセイ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008360

[巻頭エッセイ]

世界遺産ブームに思う

関雄二

(国立民族学博物館教授 アンデス文明研究会顧問)

日本における世界遺産ブームは、かなり異常である。ただでさえ、これまで世界で一番世界遺産好きな国であったのに、世界に先駆け、地方自治体からの登録申請制度を採用したことが、火に油を注ぐことになった。各自治体は、暫定リスト入りを目指し、競って登録申請に走り、首長は選挙公約に世界遺産登録を目指す一文を入れる有様だ。むろん、地方自治体だけが熱心なわけではない。市民や市民団体も、一致団結して、運動を盛り上げようとしている。こうした自治体の一つで、先ごろ観光開発に関する研究会が開催され、私もそれに参加した。

観光の中心的役割を担う歴史・民俗系の公立博物館の会議室で、朝から晩まで発表と意見交換が続いた。比較の視座を確保することから、暫定リスト入りを目指すライバルの自治体も参加し、会議は熱気を帯びた。じつは、参加した研究者には、こうした世界遺産申請の書類作成をリードし、運動推進母体の委員になっている実践者や利害関係者が多く含まれていた。長らく続くこの研究会で、私が果たす役割はいわゆるトリックスターである。へそまがりの偏屈爺さん、といったほうがこの場の雰囲気は

は合うかもしれない。

先日の会議の最終日でも、総合討論でのコメンテーターを引きうけた私は、いくつかブームを揶揄する発言をした。その趣旨は、制度そのものの意義が失われつつあることへの警鐘にあった。この世界遺産制度は、グローバル化現象の一つであり、それまで個別、せいぜい国別にしか価値判断を行ってこなかった歴史というものを、世界中から集め、権威ある組織がランク付けを行うという壮大な試みである。申請は、国別であり、文化遺産の保全は各国に全面的に任せられているので、全世界におけるランク付けというのは、大げさだという人もいる。しかし、文化ごとに意味をもってきたはずの対象物を、西洋の時間概念をもとに世界大規模に並べ、選別していることは認めざるを得ない。いわば、世界史の教科書を、ユネスコという権威が検閲を行いながら作り上げようとしているのである。

もちろん、このこと自体は、すべて悪いわけでない。他者とコミュニケーションをとるためには、共通の基盤が存在することが必要であり、その一つに、西洋的歴史観、時間観があってもよい。私たちが、アジアの人々と話し合うのに、日本語や相手国の言語を使用する以上に英語に頼ることが多いことを思い出せばわかりやすいかもしれない。その意味で、世界遺産制度は、確かに異文化理解につながる可能性は秘めている。

しかし、今の日本の世界遺産申請ブームを振り返ると、この肝心な部分がまったく

欠落していることがわかる。完全に競争に主眼が置かれてしまっている。担当する文化庁も、自治体に対し、すでに登録された遺産と、どこが違うのか、どこに世界史的な意義が存在するのか、重箱の隅をつつくような指導や指摘を行い、自治体は、これに答えるべく、研究者の知恵を借り出し、文書を作成する。ここには、世界遺産制度が持つべき、他の文化の遺産の意味や意義を見出し、互いに尊敬しあう態度など、どこかに飛んでいってしまっているといわざるをえない。これは、きわめてまずい。文化遺産の選別という、本来難しい、あるいはすべきではなかった方法を、なんとか文化の相互理解というような崇高な概念のオブラートで包み、微妙なバランスが保たれていたのが世界遺産制度だとするならば、自治体からの申請などという競争原理を無配慮に導入したがゆえに、崩れつつあるのが日本といえまいか。

国からの押し付けでなく、地元の声を活かすというのは、聞こえがよい。しかし世界遺産は、もともと峻別の制度であることを思えば、申請の希望がすべて叶えられるものでないことは誰でもわかる。限られたパイを奪おうとすれば、その先には争いしかない。そして競争だけに目を奪われていくと、ろくなことはない。途上国においては、世界文化遺産や無形遺産をめぐる問題は深刻で、政治家や文化財関係者というエリートによる文化行政の占有が横行し、文化遺産周辺の社会に恩恵がもたらされる例は少ないのである。

他国の現実などに関心を持たぬ、異文化の遺産との共生をめざそうなどと考えもしないわが国の現状は、世界遺産ブームをあおり、息抜き目的だけの観光客を増殖させ、途上国における搾取的な文化遺産観光を推進させているだけである。たとえばよいとはいえないが、まっすぐに育った胡瓜しか好まない日本が、途上国で生産された変形した胡瓜を輸入せず、さらには日本人専門家がまっすぐになるように技術指導を行うようなものである。日本で起きていることの方がおかしいという感覚がなくなり、グローバル化の中で、経済力を蓄えた上位者として下位にある途上国に強制力を行使している現実を目を背けてはなるまい。

いまの世界遺産ブームは、わが町の誇りをかきたてるだけで、その背後には、あそこに勝ったとか、つまりめ競合意識だけが見え隠れしているように思えて仕方ない。発想の転換は、世界遺産登録を地域活性化の一つの手段にすぎぬと、少しさめた見方をするにありと思う。そして、もし日本が先進国というならば、世界遺産に認定される意味を世界大的視野で問い直すべきであろう。

私が政治家ならば、わが町は世界遺産登録申請を絶対しない町として大々的に宣伝し、登録だけに満足している町々を尻目に、文化遺産の問題を考える途上国の小規模自治体やNGOとサミットでも開くところだが。